
Destiny ~ **だから**

天空 羽音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Destinyだから

【Nコード】

N6302E

【作者名】

天空 羽音

【あらすじ】

あたしの名前は鈴木公美^{きみ}だけど、ハムミと呼ばれてるうちに縮んでハムになった。身長145cmショートカットの平々凡々な容姿

1 (2008・7・11) 連日投稿)

恋愛で喜ぶなんて知らん

恋愛で怒るなんて知らん

恋愛が哀しいなんて知らん

恋愛が楽しいなんて知らん

教室の中でワイワイガヤガヤ恋だ愛だと騒いでいる奴らの気が知れない。

黙ってお弁当をモクモク食べてたら正面に座ってる千紗が突然

「ハムから好きな人の話聞いた事ないけど？」
と言ってきた。

「いない」と答えたらハムと呆れたような声がしたけどムシ。

あたしの名前は鈴木 公美^{きみ}だけと、ハムミと呼ばれてるうちに縮んでハムになった。

身長145cmショートカットの平々凡々な容姿

週1の体育館の朝礼は1番前か2番目

本当はクラスで2番目に小さいんだけど1番小さい雪ちゃんが1番前しかかった事がないって言うから時々交代してあげる

千紗は杉浦 千紗^{ちさ}今年のクラスで出席番号が前後で自然と仲良くな

り今年も同じクラス

160cmの長身はバレエ部の次期エースと噂があるスレンダー美人
私達は中学2年生。

今一番楽しいのは部活。

写真部なんだけどやっと楽しくなってきたところ
問題があるとするなら部費が少ないところかな

一番いいのは生徒達からの注文売り上げ。

去年は牧先輩がバスケットで活躍してくれてアイドル化したから良かったけど卒業した今年はどうなるんだか…

恋愛は知らんけど恋する乙女はお客様。
大いに大歓迎だからどんどん繁殖して欲しい。

待ちに待った放課後

担任の挨拶が済んだ直後カバンを抱えて走ろうとしたら体が引っぱ
られた勢いでイスにストンと座ってしまった。

ムツとしたまま横向けば隣の席の田所 公太郎こうたろうがあたしの制服の裾
を引っ張ってた。

「何すんのよ。ハム太！」

こいつはハム太郎が縮んでハム太になった。

ハム太郎のくせに165cmもあるのは詐欺だし仲間みたいな呼び名も大変気に入らない
だけじゃない

「お前に頼みがあつて」

おつとお客様なら優しくしなければ…

コホンと小さく咳払いし顔に微笑み張り付け

「はいはい。何なりと」

「……………」

せつかく接客スマイル作つたのに何で人の顔見たままだんまりかな？

「ちょっと顔に穴あくからあんま見ないでよ！」

ニヤリと笑つてハム太は

「すでに鼻に開いてる」

「へ…屁理屈ゆうなゝ例えだバカー」

アツと口を両手で塞ぎ、お客様お客様と唱えて

「で？ご用件は何かな？」

この一言から運命が始まつた

ハム太とは今のクラスになってから会話するようになったからまだ1ヶ月しか経ってない。

隣の席だから会話も他の男子よりは多いかな？でもそんだけ

「これから部室行くだろ？行きながら話すよ。俺も部活あるし」

「あつそ」

写真部の部室は旧校舎にあって体育館を挟んだ西側に位置している。運動部の部室もほとんど旧校舎にあるから目的地は一緒だし時間短縮出来て喜ばしい。

肩に軽々とカバンを担ぎ上げて正面向いたままやっとハム太は話した

「頼みってゆうのは…写真撮って欲しいんだ」

ほらやつぱりビンゴ！

お仕事お仕事♪

「いいいいいよ喜んで」

ニコニコ笑顔で見上げたら窓際の方を歩いてたハム太の顔は太陽の逆光で見えなかったけどきつと笑顔に違いない。

「で？誰撮るの？」

「あああのさ（…………）」

「はっ？聞こえないんだけど誰だって？」

「お前：チビハムだったの忘れてたよ」

その憎たらしい口も今はお客様は神様だからスルーして客じゃなくなつた時に倍返ししてやる。

「あのな」といいながら体を傾けてきたハム太

名前を聞く前に耳元かすめた吐息で背中がゾワゾワして腕に鳥肌がたつたから思わず

「セクハラ」

と大声で叫んでしまった

「ば…馬鹿かチビハム！誰がセクハラだー！！」

あつまズいお客様は神様

「あはっ今朝ニュースでやってたからあははっ
とごまかしたけど

「…お前の思考回路は随分と老朽化してるな
とデコピンされた。

「まったくお前が大声だしたおかげで目立ってしょうがないからメ
ールで教えるからアドレス交換しよう。名刺あるか？あっ…その前
にお前、携帯持ってるのか？」

どこまでも失礼な奴だなハム太郎！

「必須アイテムだからある」

カバンの内ポケットからシステム手帳を出して開き名刺を1枚取り出した。

写真頼まれるからシステム手帳も必須アイテム。

「これにメールして」

「ああ了解。今日寝る前…10時ぐらいにはメールするから宜しく！」

と片手を挙げて走りさっていった。

フフフツツて不気味な笑いが背後からしたけど気のせいだとムシしたい…

「ハムゝ見ちゃったゝハム太郎とラブラブ？」

と千紗が肩を組んできて小さい声で囁くから

「アホか…仕事の依頼！」

「なゝんだ。つままない」と肩から腕がどかれた。

「つままないって何さ」

依頼で浮かれていたあたしには千紗の盛大なため息なんかへのかっ

は

ふんふんふんふん♪

鼻歌歌いながら机の上で隣りのクラスの鮎川さんに頼まれた増田先輩の写真を袋に入れて

…システム手帳に挟んで

…よし明日渡せば依頼完了。

机から離れてベットにドサツとうつ伏せでダイビングして手足を思いつ切り伸ばした。

帰り道で見つけた散歩中の猫が可愛くて思わずカメラ構えながらソ…と追いかけて追いかけて空き地の片隅にある小さな倉庫の裏側に廃棄されたベビーカーの中に飛び込んだのを見て、あっあそこが住処なんだーなんて近ずいてみれば

「…ミャーミャー」

中では3匹の子猫にさっきの猫がおっぱいをあげてるところだった。

(カシャカシャ…)

気がつけば何枚か写真を撮ってて母猫がなんだか迷惑そうな顔で睨んでたけど特に威嚇されることもなかった。

自宅とは反対方向に追いかけたから学校まで徒歩15分なのに猫のおかげで40分もかかってしまったし疲れた。

（でも子猫可愛かったなあ〜うちマンションで飼えないしどうしようかな〜）なんて考えてるうちにウトウトしてきてすぐに夢の住人になった

朝、

パチツと目覚めて枕元の時計を見ればまだ目覚ましが鳴る前でいやにスツキリ爽やかな朝なんだけど何か忘れてたような気がして眉間にシワがよる。

まあいいか

早起きしたおかげでいつもより早めに家を出てスキップしたいほど軽快な足取りだったから7時40分に学校ついちゃった

たまには千紗の写真でも撮りにいこうかな〜未来のスーパースターかもしれないしね

体育館をソツと覗けば千紗がアタックの練習中

先生はい

ないみたいだから近くにいたマネージャーに声をかけた

「あの…おはようございます」

「あつおはよ。ハムちゃん」

と返事してくれたのは彩愛先輩あやめ

「千紗っちの写真かな？」

「はい。いいですか？」

ニツコリ微笑んでくれたからそれが合図。

なるべく邪魔しないようにズームでピントを合わせ数枚撮れて満足。

足元にコツンと当たった物を見ればバスケットボール。

体育館半分はネットで仕切ってバスケット部が使ってるから端の隙間から転がってきたみたい。

ボールを持って小走りで駆け寄りバスケット部に渡そうと見上げた先にはハム太郎がいたから

「おはよ。はいよボール」

「……………」

あれ？聞こえなかった？

「ハム太おはよ」

と笑顔でもう1度言ったら

「…はあゝ」と盛大なため息が返ってきてムツとした

「ちょっと朝の挨拶がため息って失礼な奴だね」

「どつちがだよ！」

ハム太郎を指差せば

「お前…メールみた？」

「はっ？何の？イタッ…」

バシッとデコピンされ

「タベメールした」

と呆れた声がして

「あああ~~~~~」

「バカハム。やっと思い出したのかよ…」

あちゃー

お客様は神様を忘れるなんて何てことさ

「あ…あのね。猫が可愛くてそれでその…ごめん」

と45度のお辞儀して潔く謝ってソツと見上げたらニヤリとしながら

「貸し1だからな」

「…簡単なやつでお願いします」

オーイ片付け始めるぞ」の声が聞こえたから

「じゃまた後で」

と別れて教室に向かつてたらちょうど廊下で鮎川さんに会ったから
写真を渡してお代を貰った。

「ハム」ありがとう」

胸に大事に抱きしめ走り去って行った彼女を見ながら思う。

あの猿顔の増田先輩のどこがいいのか謎だ

けど毎回こんな感じで頼まれた男子の被写体は動物に見える。先日
はヤギとブタとカエル。

今までまともに人として見たのは牧先輩。

あの人の流れるようなフォームは被写体として最高。バスケをして
ないときは河童にしか見えなかったけどさ

教室は半数ぐらい来てて挨拶かわして席に座り思い出した白い携帯
をカバンから取り出しメールを慌てて開いて見れば

見慣れないアドレスに

件名 こんにちは

本文 チビハム宜しくな！

（へっ？これだけ？相手の名前はなしかあ！返信してからだっ
たのかも遅くまで待ってたのかもしれない）

今回の依頼はいつもより丁寧に希望に近い写真を撮ってあげようと

心に決め返事を返してアドレスをハム太郎と登録した。

「ハム〜おはよっ」

と千紗がきて前の椅子を後ろ向きにしてから座り顔を近づけてきて

「フフン今朝もラブラブだったね」

と小声で言ってきたから無言でデコピンしてやる。

「イッタァ〜冗談通じないとは可愛くないよ」

「冗談はわかってる。倍返しのデコピンの練習中」

「えっ？何それ…とゆつか私を練習台になってヒドいじゃん。私も練習」

ピシッとデコピン返されお互いに赤くなったおでこをさすって笑った

「おはよ」

「「おはよ雪ちゃん」」

お嬢様系の雪ちゃん綺麗なストレートの肩までの髪を編み込みして2本に結っている。

その後ろにハム太郎もいて

「はよ〜」と挨拶しながら席についた

あたしはボンヤリと昨日の3匹の子猫の行く末を考えていた。

子猫ネコねこ…3匹の写真を現像してから

「あー閃いたー！頭いいじゃんあたしって」

と大声で叫んでから周りが静かな事に気がつきパツと両手で口を塞いだけど

「よしいいぞ！この問2は鈴木に任せた！前に来てやってくれ！次の問3は誰かいないか？」

ゲッ！目の前には数学の山ちゃん先生がニコニコしながら立っている。

いつの間にか1時間目が始まってたんだー最悪…一応教科書とノートは机の上にあるけど…困った

ガタガタと立ち上がった音がして2人が前に進んで行く所だった

「オイ！とりあえずノート持って立て」

ってハム太郎が言うから立って前に進もうとしたらハム太のノートがバサツと下に落ちた。

「あっ」

屈んで取るうしたらハム太も屈んで素早くあたしのノートと交換した。

目が合ったら小さな声で

「貸し2」と言われた。

「はあゝ助かったゝ神様仏様ハム太様々だー」
休み時間になりホッとしながら呟いてたら

「ハムつたら山ちゃん先生は答えられないと笑顔で課題プリント2枚出すんだから…危なかったね」

コクコク頷いて今度から気をつけるべしと反省。
そこに雪ちゃんも来て

「コウくんは昔から理数系得意だったから。良かったねハムちゃん」
とニッコリ笑顔で教室を出て行った。

「怖っ！」と言いながら腕をさすっている千紗

「へっ？何が怖いのだ」

「あゝ時空間違う場所にいるハムにはわかんないかなゝ」と千紗が困ったように言う

「失礼な同じ場所にいるのに異星人扱いって」

「ん？ある意味異星人」

まったくあの可憐で笑顔の雪ちゃんが怖いなんて思う千紗の方が異星人決定

やっと待ちに待った放課後が来て部活にと走りだそうしたら

「チビハム待て」

とハム太郎に肩を掴まれたから振り返って

「あたしは犬じゃない！」と言ってやった。

「その切り返しつまんね」

「ハム太を喜ばす趣味はないからつまなくても問題なし」

クツと笑いながら

「部屋まで一緒に行こう」って歩き出したから並んで着いて行く。

「そうだ。あのさ数学のお礼もあるから完璧なご希望アングルで撮ったげるからね」

「はっ？あーあ写真」

「今さ他に注文ないし…でも大会始まったりすると忙しくなるからちょうどタイミング良かった」

「そうか」

「うん。あと今夜はメール忘れないからさ」

「ああ」

並んで歩いてるハム太郎はやっぱり太陽の逆光で顔が見えなかった。

部活が終わって正門から左に足を進めようとして考え直し右手に進んだ。

昨日の子猫が気になったからちょっと寄り道してコンビニで猫缶も購入

空き地を入れて倉庫の裏をコツソリ覗けば昨日と同じように母猫にしがみついた子猫3匹。

猫缶をパキッと開けて親猫の鼻先に近づけたらピクツと鼻が動きもぞもぞ立ち上がりムシヤムシヤ食べ始めた。

「お前…お腹減ってたのに子猫におっぱいあげてたんだ…」

ジャリッと後ろから音がして驚いて振り返ればハム太が立っていた。

「な…何でいるのさ」

「コソコソ自宅と反対方向に帰る怪しい奴を学校から追跡してみた」

「えっ？どこどこその怪しい奴」と辺りを見れば
ハム太はあたしを指差し

「クッお前だ。チビハム」と笑いやがった。

「…失礼な」

こんな奴ほっというて帰る

「猫ママ頑張ってね」

と声をかけたら

「ニャオーン」と返事が返ってきた。

お礼のつもりかもとフフって笑ってバイバイして空き地から出た。

「ちょっといつまで追跡してんのさ！探偵ゴッコなら次のターゲットを捜す事をお勧めするよ」と睨んで言ったら

「俺んちお前の一つ向こう側の新築住宅」とニヤリと笑いデコピンしてきた

「イタツ…あの2月に完売した10軒の所？」

「だな」

「ふーん。ご近所だったなんて知らなかったよ」
「だらうな」

「何でそっちは知ってんのよ」

「ああ提出の書類を杉浦に拾われてそんな時に住所見てハムんちに近
いって言われたから」

「そうなんだ今まで会わなかったね」

「…そうだな」

「あっもうマンションだ。また明日ねバイバイ」

「ああ…じゃあな」と片手をちよつとあげてハム太は歩いて行つた。
エレベーターに乗ってから相手の名前を聞くのを忘れていた事に気がついただけ後の祭り

（まっ今夜メールくるからいいかあゝだけどハム太が好きな人って誰かなゝけっこういう奴だからあたしも上手くいくように願って写真撮ってあげよう）

母は出版社勤務

今日は夜勤で遅くなるとメールがきたし父はカメラマンで今は写真集の為に放浪中

今夜はあたし1人だけど慣れっこだから問題ない

作り置き of 冷凍カレーを温めて福神漬けとラッキョをのせたら完成
食べ終えてお風呂に入ったら眠気が…やたら眠いのは寄り道したせいかなと思つた時にハム太を思い出しカバンから白い携帯取り出し手に持ったままベットに座つた。

約束の10時まであと15分

手に持ってた携帯からメロディーが流れハム太からのメールを知らせる。

寝るなよ

今日は寝てないだろうな？コウタ

Re:Re:寝るなよ

失礼な？眠気こらえて起きてたよ ハム

Re:Re:Re:寝るなよ

悪かったな。で？今日の猫どうしたんだ？

Re:Re:Re:Re:寝るなよ

昨日散歩中の母猫追いかけて見つけた

Re:Re:Re:Re:Re:寝るなよ

お前んち飼えないだろ？1匹だけならもらい手に心辺りあるぞ

Re:Re:Re:Re:Re:Re:寝るな

本当に？誰よ？

Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:寝る

うちの母親

（やったー！あと2匹のもらい手は学校で捜せばいいよね。ハム太が優しい奴で良かった…違った。奴の母上に感謝だった）

幸せな気持ちのまま眠りに落ちて子猫と遊ぶ楽しい夢を見た。

《朝だー起きろー立ち上がれー負けるなキミー！ピッピーピーー
ー》

「う…うるさーい」

これ父が音声目覚ましに録音したもの。

ホイッスル使ってるからうるさくてかなわない。

毎朝この声で起きるから父が留守のような気がしないのは嬉しい事なのか

出掛ける前日に会社の空き部屋で新たに録音してくるから翌朝からビックリさせられたりする

子供の心を持ったまま親父化したような人だから写真にもそれが表れてファンになる人達がいるのかも知れないけど

夕べはハム太とメールしてたけどやっぱり相手を聞くのを忘れた。

学校で直接聞いちゃえばいいか

朝は母がいて一緒にご飯を食べた

「キミ、友達できた？」

口の中一杯に納豆ご飯だからコクコク頷いた。

「へエー女の子？」

サラダで口を塞いでたから頭を横に振る

「じゃ 男の子なんだ」

ゴックンと飲みこみ

「そうだけど、口に入れてる時を狙って質問してくるのやめて！」

「フフフッ…だってあんたの仕草が小動物みたいで可愛くてつい
い」

（まったく似た者夫婦め）

今日は母に遊ばれたから、いつもより遅いってゆうより遅刻ギリギリかも

教室についた時には千紗が机に座った所で

「お…おはっ…よっ」

はあはあ言いながら挨拶して椅子に座って机に体をあずけて休憩

「おはよ。寝坊した？」

「ちが…う…母に遊ばれた」

「プッ…楽しくていいね」

「はあ…いつでも貸し出しするからどうぞ」

隣りからガタガタつと音がして横むけばハム太が椅子に座るところで

「おはよー」って言ったのに返事は返ってこなかった。

あれから一言も話しをしないままもうすぐ放課後

ありえないんだけど？

授業中に話しかけようとするのと反対の席の子と話し出したり、休み時間は速攻でいなくなって先生と同時に教室入ってくるしこれ完璧な無視だね。

千紗もお昼休みには気がついていて

「ケンカ？」って聞いてきた。

夕べの楽しいメールは何だったんだろ？何かめっちゃくちや腹たってきた！！

「では、また明日元気に学校くるように」

担任の挨拶が終わった途端にダッシュで机から離れて行くようにしているハム太の前でおせんぼしてやった

「…っ！どけよ！」

「どかない」

「なんだってんだよ」

「こっちが聞きたいんだけど？何なわけ？」

クラスのほぼ全員が残ってたからそのうち

「ヒューヒューお熱いこって」とはやし立て始め

「えっ？ハム達って付き合ってたの？」

「コウタいつの間に」

とか勘違いの嵐が吹き始めたけど千紗の

「お黙り」の一声で静まり

「みんなさあよく見なよ？ハムが恋してる乙女に見えるの？」の問いかけに

「「見えない！」と全員が言い切り

「はい正解！では解散！」でいつもの放課後に戻った。

啞然としていたあたしとハム太に

「今日中に解決しなよ」と千紗は肩をポンと叩いて教室を出ていった

「クツクツ参ったな」って笑いながら言ってるけど参ったのはあたしも一緒

「まったく…ハム太があたしを無視するからいけないんだし」って
呟くと

「あっ？先に無視ったのそっちだろ？」

って睨んでるから相当怒ってるのがわかった

これじゃ堂々巡りだ

あたしがちよつと大人になってあげよう。

「あのさ。なんか誤解があるみたいだから部活終わったら帰りながら話そ」

「…わかった」

「待ち合わせは部室前でいいかな？」

「ああ」

ひとまず休戦。ただ原因作った奴を見つけ出し恥ずかしい写真を撮ってやりたいくらいだ

只今帰宅途中。会話無し

放課後のとうせんばは何だったんだか…怒りのパワーって凄いよね。時間経って落ち着いてみれば借りてきた猫状態。

口は金魚のようにパクパク開くけどきっかけがなくて…もう嫌だー

ー！

やっぱり腹たってきた。悪い事してないのに無視から悪いんだからあたしは悪くない。

「あ…あのさ。何で今日無視してたの？昨日はあんなに楽しかったのに」

「…それは」

「一方的に無視されてこっちの方が頭にきてるんだけど？」

その言葉にハム太は立ち止まって睨んできた

「お前：ちょっとこい！」

ガツと右手首掴まれ引つ張るように連れて来られたのは小さな三角公園

形がホントに三角形の敷地の中にブランコとベンチしかない

まっすぐベンチに向かって行ってドカツとハム太が座ったから私もその横へ

「お前、何で返事してこないわけ？」

「へっ？あたしが返事しようにもあんたが…」

「違っつて！メール！」

「はっ？メール？」

「俺は2日間もメールの返事を夜中まで待ってただけだよ？」

「えっ…一昨日はごめんだけど夕べは楽しくメールしたじゃないさ」

「ふっん？誰としたんだよ」

「へっ？えっとハム太？」

「なんだよ！」

「だからハム太としたー」

「……………」

「寝るなつてきて寝てないって返事して…あとほら子猫1匹ならあんたのお母さんが貰ってくれるって…」

「お前それマジでいつてんのかよ？」

「何であたしが嘘を？」

「はぁ〜で？夕べは楽しく俺とメールしたんだ？」

「うんうん。約束の15分前から携帯持って寝ないようにベッドに座ってまっていたんだから…それにメール終わってから子猫と遊ぶ夢見ちゃって楽しかったな〜」とニンマリしたら

「わかった。お前の話しは信じてやるけど現実をわからせてやるから携帯」とハム太は手を出してきた

「何言つてんだか」

カバンの中から携帯取り出し渡そうとしたら

「メール見てみるよ」

「メールね。……へっ？」

メール1件きていて

起きてるか？

今日寝てたらゆるさないからな！とりあえず返事まってる コウタ

「えええ……ウソォ」

夕べのメールのやり取りなんか1件もなくその1件だけが10時ジャストに届いていたことを表示してた

半分涙目でハム太を見れば

「…っ！ほらっ」って携帯見せてくれた画面には今見た文章と同じものが

「ごめんね。夢だった」

「ぶっあははっはは…」

「そんなに笑わなくても」

「わ…笑えんだろ。普通は朝、気がつくぞ」

「だってさ…リアルだったんだもん」

「まあお前が楽しかったならそれでいいけど…しかしはた迷惑な夢だな」

「だね」

「まあ原因わかって良かったよ。無視して悪かった。ごめん」

「あっ、悪いのあたしだから謝らないでよ。本当にごめんね」

「じゃこれで仲直りって事でいいよな」

「うん。ありがとう」

笑顔のハム太を見てホッとしたら涙がぼろりと落ちてすぐ拭いたけ

どハム太の方が慌てながら

「な、泣くなよ」って頭をなでてくれた

公園には普段はいるはずのチビっ子達もいなくて横の歩道を犬の散歩の人とジョギングしてるおじいちゃんが走って行く

あたしの顔は今真っ赤

頭などでなんか親にしかしてもらった事ないしだいぶ前だから恥ずかしい

「たくっ俺が泣かしたみたいだから勘弁しろよ」

「うつ…申し訳ない」

不覚にもちよっとポロツとこぼれただけなのに。

「日が暮れてきたからかえろ。腹も減ったし」

と立ち上がったからつられるように立ち上がり歩き出した

「あっあたし猫缶ならあるけど？食べ…ないね」

「いくら腹減ったって猫缶は食わない…空き地に行くはずだったのか？」

「うつん、行ける時にあげようかなって」

「そうか。あっそういえば俺んちに1匹とか言ってただろ？」

「ああ夢のメールではそんな話にも…何？マジ飼ってくれるの？」

期待を込めて顔を見上げたら困った顔をしながら

「悪い。うちトイプードルがいるんだよ。母親犬派なんだ」

「そが残念。正夢にはなかったか」ははっ

「俺も心当たりに聞いてみるから、3匹なら楽勝で飼い主見つかるよ。学校だったら1学年に1匹だ」

「あはは、すぐに見つかる気がしてきた」

「だろ？」とニツコリ笑った顔を見たらドキッと心臓の音がした。

（何か変？心臓病かな？）

「おい！」って呼ばれて

「えっ？」って返事したら

「お前んち通り過ぎるぞ」

見ればマンション素通りするところだった。

「別に着いてきてもいいけどな、飯ぐらいなら食わしてやる」

「犬じゃないんだから…」

「ククっ冗談でもなかったんだけど、まあまたな。メール9時にするよ」

「わかった。バイバイ」

母に

「もう寝るの？」って不思議がられたけど今日こそは約束守らないと今度こそあきられる

それにバスケやって疲れてるのに2日間も夜中まで起きてたら怒りたくもなる気持ちもわかる

携帯からメロディーが流れてビックリした。

時計はまだ8時35分

メールを見れば

仲直り？

ヤッホーハム元気？あの後どうなった？仲直りできた？千紗

Re：仲直り？

うん。原因はあたしだった。明日詳しく話す。ハム

（明日千紗に話したら呆れられるだろうけど放課後の騒ぎを鎮めてくれた事もあるしちゃんと報告しないといけないな）

また携帯のメロディー

今度こそ送信者にハム太郎の名前が表示され、また夢じゃないのを確かめる為にほったつねったら痛かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6302e/>

Destiny ~ だから

2010年10月17日03時20分発行